

翻訳『柘榴屋敷』

佐 野 栄 一

はじめに

ここに訳出したのは一八三三年に発表されたバルザックの短篇小説『柘榴屋敷』である。バルザックが、実業に失敗して借金にまみれ、背水の陣で小説家としてスタートしたのは一八二九年、三十歳の時であった。以後、矢継ぎ早に作品を発表するようになるが、それはまさに「自転車操業」の結果であった。まだ海の物とも山の物とも分からない構想段階で約束し、金を受け取る。彼は借金取りにも追われたが、約束の作品の完成にも追われ続けた。しかも、しばしば何本も同時並行で、無責任に思えるほどである。しかし、出版人からは無責任に見えたかもしれないが、バルザックは無責任ではなかった。粗製乱造を全くしていない。よく知られているように、彼ほど、出版人からは腹立たしくてならなかった度重なる校正に校正を重ねた作家もいないのである。

バルザックは、一八三四年、金に窮しながら次々に新しい物語を作り出してゆく中で、ふと、すべての物語を繋いで巨大な小説宇宙を作るといふのはどうか、と思い付く。天才は、それを具体的に構想し始めた瞬間、自ら、俺は間違いない天才だ、と思ったらしい。妹の家に駆け込んで、「俺は天才になった!」と叫んでいる。そのことが、妹ローヌの手記に記されている。かくして、「人物再登場」という手法が生まれ、『ゴリオ爺さん』から実際に適用された。以来、バルザックは、それまでの作品をそれ以後の作品に巧みに繋いでゆく。また逆に、再版の際に加筆修正を加えて、以後の作品に以前の作品を改変しながら繋いでゆく。

『柘榴屋敷』は、彼がまだ「天才」になる前の作品である。しかし、「天才」になってから、この小説はまず『ゴリオ爺さん』に、次に『谷間の百合』に、最後に『二人の若妻の手記』に関連付けられた。その結果、すばらしい奥行と響きを持つ作品になった。そのことは先に発表した拙稿にあるから、興味のある方は是非ご一読いただきたい。

だが、『柘榴屋敷』は、たとえそうした他の作品との有機性を読者が知らなくとも、一個の独立した小品として十分に楽しむことができる作品である。私は、初期の、小粒の、最も透明度の高いダイヤモンドだと思っている。

初期の作品は、どれも、彼の基本的な小説形式である長い描写から始まる。まず舞台となる土地を描き、建物を描き、内部の構造や調度を描き、ようやく人物が出てきたかと思うと、今度はその人物の外貌を描き始める。実に悠然と順序正しく進んでゆき、現代のたいがいの読者は、最初の数頁を忍耐するともう嫌になる。

しかし、テレビもラジオも、一般には、書物も、自宅で読める新聞すらもない（本も新聞も高価なため、庶民は今の漫画喫茶みたいところに読みに行った）、きわめて情報の僅かだった時代、「嫌になる」この描写は、現代よりはるかに、狭い領域で生きる人々の知識欲に応え、また未知の世界に憧れる人々の想像力を刺激して、

彼らが減多に味わうことのできない精神の愉悦と充足感を与えたはずである。

だから我慢しろ、と言うつもりはない。ただ、文学の読書の深さは、知への欲求と、ここにはないものへの憧れと、それを源にする想像力とにかかっていることは、今も昔も変りはない。そして、高貴な精神的愉悦は深い読書でしか得られないものである。

ともあれ、このわれわれを辟易させる最初の長い描写、その中で、バルザックは、単に物語の箱となる物質的な状況を説明しているのではない。実は、ドラマに必要なリアリティや、たとえば弦楽器が高らかに鳴るための共鳴箱のようなものを、予め描写をとおしてがっちり作っておこうとしているのである。だから、この準備が万端だと、物語が動き始めるや、鮮明なイメージを持って筋は疾走するように展開し、みるみる結末へと至る。最後の数頁に、見事なまでに感動が凝縮されている。いわば、そこに来ると、われわれの脳のシナプスが、不意に、一挙に、光の放出を始めるような具合なのである。これは長い描写に忍耐した読者だけが本当に深く味わえる心の御馳走だと思う。

『柘榴屋敷』は初夏から物語が始まっている。ロワール河の谷間の夏がいかに美しいか、読者は、風景や植物の長い描写をとおして、あるいは叙述をとおして、イメージをしっかりと頭に刻み込む。そして、物語は秋に終わる。最初に美しい夏のイメージを頭に刻み込んだ者は、おのずと、秋が、夏をはるかに凌駕して美しいことを理解し、想像する。物語と共にめぐるこの季節の変化を感じ取るとき、物語は深い詩情を帯びる。物語を包む空間の壮麗な美しさが、感動の透明度をひととき高めるのである。

バルザックは、数々の重厚長大な小説で有名であるから、一般には、彼の短篇と聞くと、比較的価値の少ないもののように思われがちである。しかし、短篇には、しばしば、長篇ではその膨大さ広大さのゆえに感じ取ることが難しい、彼の詩人の一面が色濃く現れており、『柘榴屋敷』はそうした名品の一つなのである。私は、

翻訳しながら、いくども目頭を熱くした。思わず落涙もした。それは、この短篇の文体や感動の性格が簡素で、ストレートで、それだけに訴えかける力が強いからである。また、物語を包む自然のイメージが単一できわめて美しいからである。長篇の複雑に入り組んだ関係から湧き上がる重く深い感動とはまた別の、素直で、純で、そして何より優しい感動が、このバルザックの小品にはある。『柘榴屋敷』はすばらしい読後感の得られる小説である。人間の持つ善意を素直に感じ取ることのできる小説である。この気持ち、多くの人と共有できれば幸甚である。

柘榴屋敷

オノレ・ド・バルザック作

佐野 栄一訳

トゥール橋から一・五キロほど下ったロワール河の右岸に、邸としてはこじんまりと、柘榴屋敷が建っている。河は、この辺りで湖のように広がって、緑の茂った中の島が点在し、兩岸は岩丘で縁取られ、その頂には、どれも白い石で建てられた別荘が鎮座している。別荘は、ブドウの木や世界でもとりわけ美しい果実の庭に囲まれており、南からいっばいに射す陽光が、その実をたわわに熟させている。岩丘のへこんだ部分も、いく世代にもわたって辛抱強く土が運ばれたおかげで、陽が当たって照り返すようになり、この人為による熱のおかげで、最も暖かい土地の作物でも露地栽培ができるようになった。この岩丘はところどころで沈降によって断絶しているが、その沈降の中でもとりわけ浅い沈降地の一つに、サン・シールの教会の尖塔がそびえている。サン・シールとは、小さな村の名で、この辺りに散在する別荘のいずれもがこの村に属している。そこからさらにもう少しばかり遠くまで行くと、肥沃な谷間を形成するシヨワジル川が、ロワール河沿の長い丘陵を途中で断ち切る形で合流している。柘榴屋敷は、教会にほど近い岩丘の中腹にある。それは、トゥーレーヌ地方の風光明媚な場所なら必ず見かける築後二、三百年を経た古い建物である。緩やかな坂道が、岩の裂け目を利用して作られ、「盛土堤^{ルヴェ}」へと通じている。「盛土堤」とは、ロワール河の流れが乱れないよう丘陵のたもとに作った堤防を意味するこの地方の言葉で、その上をパリとナントをつなぐ幹線道路が走っている。緩やかな坂道の上には門がある。そこから砂利道が始まり、二つの土壇^{テラス}の間を通っている。土壇にはブドウ畑と果樹の

垣根があり、土砂崩れを防ぐ防護工事を施すのと同じ役割を果たしている。高い方の土壇の裾に作られた小道は、低い方の土壇の木に隠されてほとんど見えないが、一步上るごとに河の眺望がどんどん広がる急傾斜をなして、邸へと通じている。この陰となっている小道のつき当たりには、二つ目のゴシック様式の門がある。門は、もう風化してしまっているが、何か簡素な装飾らしきものを施したアーチ型で、野生のニオイアラセイトウやキヅタ、苔やイラクサで蔽われている。これら生命力の強い植物は、壁面やすべての土壇を飾り、また礎石の隙間から生えて、季節ごとに新しい花輪を作り出してくれる。

あちこち虫に食われたこの門をくぐると、岩丘の上に作られた最後の土壇となる小さな庭園がある。庭園の古びた黒い欄干からは、他の土壇がすべて眼下に見え、また何本かの緑の樹木や、バラなど、数多くの花々で飾られた芝生を見渡すことができる。そして、土壇の反対側の端に、正門と向かい合う格好で、石垣に隣接する木造のあずま屋がある。柱は、いずれも周りにジャスミンやスイカズラ、ブドウやクレマチスが茂って、見えなくなっている。邸は、この最後の庭園の中央の、基壇の上に建っている。基壇はブドウの木ですっかり覆われてこんもりとふくらんでおり、その中に、岩の中に穿たれた地下室へと通じるドアが見える。邸は、ブドウ棚と自然のままに育った柘榴の木に取り囲まれており、そこに、この小さな囲い地農園のような屋敷の名の由来を見ることができ、建物の正面は、二つの大きな窓で構成されている。この二つの大窓を分け隔てる形で、大変田舎びた様式の混淆したドアがある。屋根は、一階の軒の丈にくらべると驚くほど高く、三つの出窓が作られている。両切妻屋根で、スレートによって葺かれている。母屋の壁は黄色く塗られ、ドアや一階の鎧戸、出窓の鎧戸は、緑に塗られている。

中に入ると、すぐに小さな踊り場が目飛び込んでくる。回り階段がそこから始まっており、角を一つ曲がるごとに様式に変化があるのに気づく。階段は木製で、ほとんど腐りかかっている。綱模様彫られた手す

りは、長い間使われてきて飴色になっている。右には、昔風に羽目板を張った広い食堂があり、床にはシャトー・ルニョー（産地名）の白い方形タイルが敷かれている。続いて、左には、同じような大きさのサロンがあり、こちらは板張りではなく、緑で縁取られた淡いピンクの壁紙が貼られている。どちらの部屋にも、天井板は張られていない。梁は胡桃の木で、梁と梁との間には、繊維くずを入れて捏ねあげた白土が塗られている。二階には、大きな部屋が二間あり、壁には漆喰が塗られている。部屋にはそれぞれ石の暖炉があるが、一階のものにくらべると、二階のものは装飾の彫りに見劣りがする。出入口は、どの部屋もみな南に向いている。北に向かつて開くドアといえば、ただ一つブドウ畑に面したドアがあるだけで、階段の後ろに作られている。家の左側には、木骨をそのまま見せる作りの建物（コロンバージュ）が軒を接しており、一見すると、母屋のスレート屋根がその木骨を雨水や日光から守っているように見えるが、壁には横一線に青く長い筋ができている。この田舎家のような建物の中に、台所が置かれている。内部はそのまま母屋に通じているが、それでも別個に出入口があり、数段の踏み段を降りると、深い井戸がある。サビナビヤクシンや種々の水生植物、また丈の高い雑草が、井戸の古風なポンプを覆い隠すように生い茂っている。昔、柘榴屋敷がただのブドウ収穫小屋にすぎなかったことが、この最近建て増された大きな建物のおかげでわかる。持主一家は、ロワールの広い川床によって町から隔てられているこの小屋へ、もっぱら収穫のためだけに、さもなくばいくばくかの遊興のために、町からやってくるにすぎなかった。彼らは朝から食糧の搬入を始めて小屋に泊まり込んだが、それはほぼ収穫の期間だけのことであった。ところが、トゥーレーヌ地方へイギリス人たちがイナゴの大群のごとく押し寄せ、彼らに貸し出すために柘榴屋敷は増築する必要が生じた。ただ、幸いなことに、新たに建て増された今風の部分は、ブドウ畑の下の窪地に最初に一列に植えられた菩提樹並木の陰になって隠されている。邸よりさらに高い位置に、ニアルパン（四〇〇一〇〇アール）ほどと思われるブドウ畑があり、容易に登れない

ほどの急勾配をなして広がっている。ブドウの枝が下まで垂れて青々としたその丘と邸との間には、せいぜい五ピエ（約一・六メートル）ほどの間隔があるかないかで、いつもひんやりと湿っており、植物が密生し、まるで堀のようになっていいる。雨期になると、そこからブドウの肥料が下へ流れ落ちてきて、手摺をめぐらした土壇の状態で保持されている庭の土に栄養を与えることになる。邸の左手には、ブドウ畑の世話をする小作人の家が背中合わせに建っている。藁ぶきの家で、台所の建物と対をなすかのように建てられている。柘榴屋敷の地所は、石垣と果樹の垣根で囲まれ、ブドウ畑にはありとあらゆる果樹が植えられ、要するに、貴重な土地の一片たりとも耕作のために無駄にされているところがない。もし人がなおざりにしているところがあるとすれば、それは不毛な岩の部分だが、自然はそこにも、むしろ岩石のおかげで他の植物から守られるイチジクや野生の花、あるいはまた野イチゴなどを生えさせている。

世界中のどこに行っても、ここほどつましくもまた壮大で、ここほど果実がたわわに実り、ここほど豊かな香りに包まれ、ここほど眺望の素晴らしい住まいを見つけることはできないだろう。この住まいはトゥーレーヌの中心にある。しかも、ここには、この地方のあらゆる花々が、あらゆる果物が、あらゆる美が、完全にそろっているから、まさにここは小トゥーレーヌなのだ。あらゆる地方のブドウ、あらゆる種類のイチジクやモモやナシ、野天のメロン、また同じく、甘草、スペインのエニシダ、イタリアの夾竹桃、アゾレス諸島のジャスミンが、ここにはある。ロワール河は足下にある。変化に富んだ水の流れから三〇トワーズ（約六〇メートル）上にある高い土壇から、ロワール河が一望できる。夜には、海から吹いてくる涼しい微風を吸うことができる。しかも、その風は、道すがら長い堤防の上に咲く花々の上を吹きわたって、芳香を含んでいるのだ。空を漂う雲は、真つ青な空を背景に絶えず動きながら色や形を変え、どこにしようとしても見渡せる壮麗な風景の細部にまで多彩で新たな景色を作り出す。そこからは、まず、アンボワーズからこちら

までのロワール河左岸が一望できる。つまり、トゥールとその周辺と工場群とル・プレシの建物が建つ肥沃な平野が一望できる。続いて、楽しいブドウ畑をいっぱいに乗せた岩丘が半円を描く、ヴーヴレイからサン・サンフォリアンまでの右岸（原文では誤って左岸となっている）の一部が一望できる。眺望の果てにあるのは、シエール川の豊穡な丘の連なりと、数々の荘園や城館を載せた青い地平線だけである。そして西に目を転ずると、心は雄大な河の流れへと引き込まれる。河には帆船が常に行き交い、その白い帆は、この広大な流域に絶え間なく吹きわたる風を受けていっぱい膨らんでいる。王侯ならば、柘榴屋敷を離宮にするかもしれない。だが、詩人なら、きつとここを終の住処とするだろう。恋人同士なら、ここに最高に甘美な隠れ家を見るだろう。いま、ここはトゥールのさる金持ちの邸になっている。柘榴屋敷には詩情^{ポエジー}があるのだ。最も高揚した想像力や最も情熱的な想像力に対しても、また同様に最も地味な想像力や最も冷静な想像力に対しても、どのような性質の想像力に対しても、ここは詩情を感じさせるのだ。ここにおいて、幸福の空気を感じ取らない者はいない。ここにおいて、野心からも気がかりからも抜け出した静かな生活のありうることを理解しない者はいない。夢想は大気の中に、また波のささやきの中にある。砂が語りかける。それは、憂鬱でもあれば、陽気でもあり、金色に輝いてもいれば、どんよりとくすんでもいる。このブドウ園の持主は、生き生きした花々やおいしいような果物に取り囲まれて不動だが、彼の周りではすべてが動いている。あるイギリス人は、このつつましい邸に半年居住するために千フラン払う。ただし、収穫物には手を出さないという契約で。もし果物もほしいなら、家賃は倍になり、さらに葡萄酒で酔いたいとも望んだら、支払いはそのまた倍額になる。柘榴屋敷のその斜面、その窪んだ道、その三つの土壇、その二アルパンのブドウ畑、その花咲くバラのある手摺、その古びた階段、そのポンプ、その咲き乱れるクレマチス、そしてそこに植わるいろいろな国の多様な樹木、こうした諸々のものとともにある柘榴屋敷、それに匹敵するものなどあろうか。値段などつけられようか。と言って

も、柘榴屋敷が売りに出されるようなことなど、けっしてあるまい。かつて、一六九〇年に購入された後で、ちようどアラブ人が砂漠の前に愛馬をあきらめねばならなかったように、四万フランで心ならずも手放されたことがあった。しかし、柘榴屋敷は、その後はずっとある一家のものとなり、一家は、王家に代々継承される宝石、摂政ダイヤモン^{（注）}ドのように、いまでもそれを誇りにしている。ある詩人の言を引けば、見ることすなわち所有すること、ではないのか。柘榴屋敷からは、トゥーレーヌの三つの谷や、透かし細工のように大気の中に浮かび上がる大伽藍を見ることができる。このような宝を金で買うことができようか。ここの菩提樹の木陰で健康を取り戻しうるとしたら、その健康にいくら金を払うとしてもけっして払いきれものではない。

王政復古期の中でもとりわけ華麗だった時代のある春のこと、家政婦と、下は八歳くらい、もう一人は十三歳くらいの二人の子供を連れた婦人が、トゥールに住まいを探しにやって来た。彼女は柘榴屋敷を見て、それを借りた。おそらく、町から隔たっているほどよい距離が、邸を借りる決心をさせた理由だった。彼女はサロンを自分の寝室にし、子供たちにはそれぞれ二階に部屋を与えた。家政婦は、台所の上にしつらえられていた小部屋で寝た。食堂がこの小さな家族のサロンとなり応接間となった。邸の家具はごく簡素に調えられたが、趣味はすぐれていた。無駄なものは一切なく、贅沢を感じさせるものも皆無だった。その見知らぬ女の選んだ家具は、胡桃材でできており、何の装飾もなかった。清潔感と、邸の内と外とを支配している統一感によって、この邸は全く魅力的なものになっていた。

ヴィレムセンス夫人、それがこの外国人女性の名であるが、彼女が、裕福なブルジョワ階級の人なのか、上流貴族の出身なのか、あるいは女性特有の何とも明言しがたい階級に属す人なのか、それを知るのは容易ではなかった。彼女の淡白で飾り気のない様子が、まったく矛盾するさまざまな憶測の原因になっていた。しかし、彼女の立居振舞を見れば、好意的な推測こそ適切なことは明らかだった。だから、彼女がサン・シールに

やつて来てほどなくすると、その控え目な様子が暇を持て余す人たちの興味を掻き立てた。田舎に住む彼らは、いつだって、自分たちの生きる狭い世界に活気を呼ぶかもしれないことなら、どんなことにでも目をこらして観察するからである。ヴィレムセンス夫人は、かなり背の高い、痩せてほっそりとした、しかし繊細な美しさを備えた女性だった。きれいな足首をしていた。俗に言われる細いところが魅力的だったのではなく、足を揃えるときの優美さが際立っていた。また、きれいな手をしていた。それは手袋をはめても美しさが感じられる手であつた。昔はみずみずしく色艶も良かった色白の顔に、いまはあちこち場所を変えて出る濃い赤斑があつて、顔色を赤く染めていた。年の割には早いしわが何本か額に刻まれ、上品な形をしたせつかくの額を老けさせていた。彼女は生え際のきれいな美しい栗色の髪をしており、それをいつも少女がするように二本の三つ編みにしてから輪を作っていたが、その髪型は彼女の沈んだ表情によく合っていた。落ち窪んで濃い隈のできた黒い目は、熱く激しい感情を湛えており、静けさを装っていても、それは偽りのものでしかなかった。だから、時として、彼女が静かな表情でいなければならぬのを忘れると、そこには人知れぬ苦悩が描き出された。彼女の楕円の顔はすこし長めであつたが、昔は、おそらく幸福と健康のおかげで、申し分なく均斉のとれた形をしていたろう。やさしさと悲しみを含んだ偽りの微笑が、いつも血色の悪い唇に浮かべられていた。それでも、四六時中まとわりついている二人の子供が彼女を見つめたり、たわいない際限もない、しかし母親にとってはすべて意味のある質問をしたりするときには、彼女の口は活気づき、そのほほえみには母の喜びあふれる気持が現れるのだつた。彼女の歩き方はゆっくりとして品があつた。あえて同じ服装をし続けていたが、そこからは、もう身だしなみに心を砕くつもりがなく、世間を忘れおそらくは世間からも忘れてもらおうとする明確な意志がうかがえた。彼女は裾のとても長い黒いドレスをまとい、モアレ織の帯を締め、シヨールの代わりに幅の広い折り返しのある薄いバティスト織の肩掛け^{フイシユ}をして、その両端を無造作に帯に通していた。靴の履き

方にはかつての優雅な習慣が垣間見え、灰色の絹のストッキングは、普段着の中に漂う喪の様相を完全なものにしていた。そして最後に、彼女のイギリスのオーソドックスな型の帽子は、灰色の布で作られ、黒いベールがあしらわれていた。彼女は、大変体が弱くひどく苦しんでいるように見えた。彼女がする唯一の散歩といえは、柘榴屋敷からトゥール橋まで行くことだった。穏やかな夕方には、子供と一緒にやって来て、ロワール河の新鮮な空気を吸い、ナポリ湾やジュネーブ湖と変わらぬほど雄大な沈みゆく夕陽が作り出すさまざまな光の効果を見て楽しんだ。柘榴屋敷に滞在中、彼女がトゥールまで行ったのは二回だけだった。最初は、中学校の校長に会って、子供たちのためにラテン語、数学、製図の最も良い先生を教えてもらうためで、二度目は、そうして選任された先生と、学課の謝礼や教える時間について決めるためだった。しかし、普段そのあたりを散歩するほぼすべての市民の興味を掻き立てるには、彼女が、週に一度か二度、夕方姿を見せるだけで十分だった。地方においては、その中心的地位を占める社交界の人々が、無為や心配性の好奇心の赴くままに、無邪気な一種の諜報活動にいそしむものである。ところがそれにもかかわらず、この見知らぬ女性が社交界でどんな地位を占めていたのか、彼女の財産はどのくらいなのか、また本当のところ、どのような身分の人なのか、そうしたことに関する確かな情報は誰にも得られなかった。ただ柘榴屋敷の家主だけが、賃貸契約を結ぶ際に用いられた、たぶん彼女の本名と思われるものを、親しい友人の何人かに教えた。彼女は、ブランドン伯爵夫人、オーギスタ・ヴィレムセンス、という名前なのであった。このブランドンという姓は、夫のものであるにちがいがなかった。家主の明かした名が本当であることは、この物語も終わりのほうになって起こる様々な出来事によって確かめられるが、この事実が広がったのは、わずかに家主が親しく出入りしていた商人世界の中だけであった。つまり、ヴィレムセンス夫人は、当地の上流社交界の人々にとっては、ずっと神秘のままだったのである。彼女を観察して見抜けたことといえば、彼女の性質が高貴であったこと、飾り気がなく、しかし繊細

で自然な物腰であったこと、天使のようにやさしい声をしていたこと、それだけであった。彼女の深い孤独、憂鬱、もう半ばしおれているが激しい情熱の陰を落とす美しさ、そこには、とても人を惹きつけるものがあつたから、いく人かの青年が彼女に夢中になった。しかし、真剣に恋すれば恋するほど、大胆な振舞ができなくなつた。彼女には威厳があり、話しかける勇気を出すのが難しかったからである。それでも、仮に何人か大胆な男がいて手紙をよこすようなことがあつたとしても、その手紙は開封されることもなく火に投じられたにちがいない。実際、彼女は受け取るものすべてを火に投じていた。それはあたかも、トゥーレーヌにいる間はどうどんなに軽い氣遣いであらうとそれにとらわれることなく過ぎたい、と望んでいるかのようなのであつた。彼女は、生きる幸福に完全に身を委ねるために、このすばらしい隠棲所にやって来たように思われる。柘榴屋敷に入ることを許された三人の教師は、ある種の敬意に満ちた憧憬をこめて、子供たちと母との曇りない親密な一体感が現れている絵のように感動的な光景について語つた。

二人の子供たちも同様に、大いに興味を掻き立てた。世の母親たちは、彼らを見て、羨ましさを禁じえなかつた。二人ともヴィレムセンス夫人によく似ており、なるほど彼女は二人の母親だな、と思わせた。どちらも生き生きとした血色のいい透けるような肌をし、まつげは長く、体の線はあくまでみずみずしく、それらのものすべてが、幼少年期特有の美しさにいっその輝きを添えていた。上の子はルイ・ガストンといい、黒髪で、ものおじしない大胆なまなざしをしていた。どこを見ても、彼が丈夫で健康そうなことがうかがえ、広く秀でてほどよく突き出た額も、彼が精力的な性格をしていることをやはり表していた。彼は敏捷で、運動が巧みで、実に均斉のとれた体をしており、ぎこちないところが全然なく、何にも驚かず、自分が見たものすべてをじっくり考える性格のようだった。下の子は、マリー・ガストンといった。金髪と言いうる髪だが、一部すでに母親の髪の色と同じ灰色になっているところがあつた。マリーは体つきが華奢で、繊細な顔立ちをし、優

美で洗練された趣があった。それはまさに、ヴィレムセンス夫人をあれほど魅力的にしているものであった。彼は体が弱そうだった。灰色の目はやさしいまなざしを投げかけ、顔色には血色が乏しかった。彼の中には何か女性的なものがあつた。母は彼にまだ刺繍のついた飾り襟をつけさせ、髪を長い巻き毛にカールさせ、ボタンのホールに飾り紐とオリーブ型ボタンのついた小さな上着を着せていた。少年がこんな服を着ていると何とも言えず優雅なものである。そこにはしごく女性的な装いをさせることの喜びが垣間見えていた。おそらくは、母親も子供も同じ様にこの装いを楽しんでいた。この弟のかわいい服装は、兄の、シャツの無地の襟を出して上で折り返しただけの簡素な上着と対照的だった。ズボン、編み上げ靴、着物の色は、互いに似通っていて、それを見れば二人が似た者同士であるとも、なるほど兄弟であるとも感じられた。二人を見て、ルイがマリーになにかと気を配っている様に、感動せずにいることは不可能だった。兄は弟に、何か父性愛のようなものを持っていることがそのまなざしから感じられた。また、マリーのほうも、年端のゆかない無頓着さはあるものの、ルイに対する感謝の気持ちを十二分に持っているように思われた。たとえれば、二人は同じ茎の上でわずかに離れて咲く二つの小さな花で、そよ風が吹けば同じように揺れ、太陽の光に同じように照らされているが、一方は色鮮やかなのに対し、他方は彩色が弱々しい、そういう花たちだった。二人は、母の一言で、一瞥で、声の抑揚で、すぐに母に注意を向け、母のほうを見て、その命令を、求めを、忠告を聞いて理解し、それに従った。ヴィレムセンス夫人はいつでも、まるで三人の間には共通の思いが存在しているかのごとく、自分の望みや意志を子供たちに理解させた。散歩の間、二人が彼女の前で花を摘んだり昆虫をじっと見たりして遊びに熱中していると、彼女はとても深い感動に満ちたまなざしで子供たちを見つめた。そのために、物事に全く無関心な通りがかりの人さえも感動を覚え、立ち止まって子供たちを見、二人にはほえみかけ、それから母親に、親しい友人のような一瞥を投じて挨拶するのだった。子供たちの衣服の気持ちのいい清潔さ、澄んだ

声、動きの優美さ、幸せそうな表情、ゆりかごに揺られていたころから大事に育てられたことをうかがわせる自然な気品、こうしたものに心打たれない者がいようか。この子供たちは、今まで一度も大きな声を出したこともなければ泣いたこともないように見えた。二人の母は、彼らの望みや苦しみを電気を通して感じ取る透視能力のようなものを備えていて、いつでも二人に心の準備をさせ、落ち着いていられるようにさせるのだった。彼女は、自分に対する死の宣告以上に、子供たちに何か苦痛が生まれることを恐れているように見えた。母にとっては、子供たちの中にあるものすべてが称賛の対象なのである。一つの生活にも思える三人の生活の光景を見ていると、ぼんやりとした何か心地よい観念のようなものが、あるいは、われわれがこの世界よりもつとよい世界で味わいたいと夢見る幸福のイメージのようなものが、浮かんてくる。これほど調和のとれた三人の、家の中での生活は、彼らの外見から想像されるものと実によく合致していた。それは秩序のある、規則正しい、簡素な生活で、子供たちの教育に最適のものであった。二人とも、日が昇ると一時間後には起床し、まず短いお祈りを唱える。それは、小さな頃からの習慣であり、七年間母のベッドの上で繰り返された真実の言葉で、接吻で始まり接吻で終わるものだった。次に、二人は、きれいな女性がそれをするのと変わらぬほどの入念さで身づくろいをする。人間が身だしなみに気を使うということは、肉体の健康にとっても精神の清浄にとっても必要なことであり、言うなれば、生きている満足感を与えるものである。身だしなみに気を配ることは、確実に二人の習慣となっていた。二人はどんなこともおろそかにしなかった。それほど母に咎められることを二人とも恐れていた。たとえそれがどんなに優しく言われようとも。たとえば、朝食のとき、母が二人を抱いて、こんな風に言ったとしても。「かわい子子供たちたら、どこで、もうこんなに、爪を汚すことができたのかしら」。それまで、二人は庭に下りていたのだった。彼らは母が起きるまでサロンに行つて勉強することになっていたが、そのサロンを家政婦が整えに来るまで、朝露と涼気の中で、まだ残る夜の印象を振り払

うように、遊び回っていたのだった。けれども、たしかに決められた時間まで母の部屋に入ってはいけないうちになつてはいたが、ときには、母が目覚めるのをじっと窺っていることもあった。そうやって、朝突然母の部屋に入ることは、最初に決めた約束を破ることではあったが、それは、彼らにとってもヴィレムセンス夫人にとつても、このうえなく甘美なひとときになるのだった。マリーは大好きな母を抱きしめようとベッドの上へ飛び乗った。一方、ルイは母の枕もとに膝まづいて母の手を取った。そんなとき、二人は、まるで恋する男が恋人にするようにくつもの気づかわしげな問いかけを母にした。それから、子供たちのかわいい笑い声が聞こえ、母が情熱的にまた同時に清らかに二人を愛撫すると、雄弁な沈黙の時間が流れた。そして、幼い片言の物言いや、接吻で途切れたりまた続けられたりするのために、めつたに最後まで話されることのない子供らしいお話を、母はいつでもちゃんと耳を傾けて聞くのだった。

「しつかり勉強しましたか」と母は尋ねる。その声は優しく親しみがこもっていたが、気を抜くことはよくないと言おうとしていて、ちょうど自分に満足している人間に不幸な人間が涙にぬれたまなざしを投げかけるようなところがあった。彼女は、子供たちが母に気に入られたい一心で頑張ることを知っていた。一方、子供たちは、母がひたすら自分たちだけのために生きており、愛の持つ英知のすべてを傾注して人生へと導こうとしているのを、また、自分たちのことだけに思いをめぐらし、自分たちのためにすべての時間を使っているのを知っていた。子供たちにはある驚くべき感覚が宿っている。そこにはまだ利己性も分別もない。おそらくはごく初期段階の純真さの中にある感情と思われるが、それによって子供たちは、自分が特別な注意の対象となつて面倒を見られているかどうか、また人は自分の世話をして幸せを感じているかどうかを嗅ぎ分けるのである。諸兄は、子供たちをちゃんと愛しているだろうか。この率直そのもので公正そのものの愛しい被造物は、ちゃんと愛すれば見事に感謝で応える。彼らは情熱的に愛し、嫉妬し、最高に優雅な繊細さを備え、最

も情愛に満ちた言葉を見つけて言う。彼らは信頼でき、あらゆることにおいて諸兄を信じている。だから、おそらく、悪い母親がいなければ悪い子供は存在しないのだ。彼らはこれまで経験した愛情をもとに愛情を感じる。つまり、最初に受けたさまざまな世話や、最初に聞いた言葉や、またそこに愛や生命を求めた最初のまなざしが、愛情の元になっている。だから、どんなことも愛着となりうるし、どんなことも反発となりうる。神が母の胸許に子供を置いたのは、子供たちは長くそこにいなくてはならないということを母親に分からせるためである。しかしながら、世には残酷な誤解を受ける母や絶えず傷つけられる深く崇高な愛というものもある。恐ろしい忘恩だが、それは、感情の問題に関しては、絶対的な原理を確立することがいかに困難であるかを示している。さて、この母とこの子供たちの間には、人と人とを結びつけているにちがいないおびただしい糸のどれ一本として欠けているものはなかった。この地上で、同じ生を生き、互いに深く理解し合えるのは彼らだけだった。朝、ヴィレムセンス夫人が沈黙の中に沈んでいると、ルイとマリーは、彼らには共有できないさまざまな思いを含め、母のすべてを尊重していたから、ただじっと口をつぐんでいた。しかし、兄は、すでにしっかりとした思考力を身につけていたから、母の、私の健康は大丈夫よ、という言葉に、けっして安心して満足することはなかった。彼は暗い不安な思いで母の顔を観察し、その危険がどういうものかは知らなかったものの、目の周りに紫色の隈ができているのを見て、また眼窩がさらに落ち窪み、顔の赤斑がさらに濃くなっているのに気がついて、危険を予感した。彼は本当に濃やかな感受性を備えていたから、マリーの遊びが母を疲れさせ始めていると見抜くと、弟に「マリー、さあ、朝ごはんを食べに行こう、ぼくお腹がすいたよ」と言うのだった。

しかし、ドアの所まで来ると、彼は振り返るのだった。そして、母の疲れ具合がどの程度か表情を見る。すると母は、彼のためにもう一度ほほえみ、子供のしぐさにひどく優しい気持ちが現れていたり、苦しみに対す

る早熟な理解が現れていたりすると、しばしば目にいっぱいの涙を溜めていた。

子供たちが朝食を食べて自由に遊ぶ時間を、ヴィレムセンス夫人は身づくろいする時間にあてていた。彼女は愛する子供たちにとって魅力的でありたかった。二人に気に入られ、あらゆることで二人の気持ちに適い、優美だと見られ、いつでも懐かしく思い出される、あたかも甘い匂いのような心惹かれる存在でありたかった。彼女はいつでも、十時から三時の間に行われる復習の時間に、子供たちの相手ができるようにしていた。その間の正午には、昼食のための中断があり、庭のあずまやでみんな一緒に昼食を食べる。この食事が終わると、子供たちは一時間遊んでもいいことになっていた。幸せな母は、また不幸な女は、その間、あずまやに設置した長椅子の上に横になる。そこからは、陽ざしや空や季節のさまざまな偶然の効果によってたえず新たな、不変に変化する優しいトゥーレーヌを見出すことができた。二人の子供たちは、果樹園の中を歩き回る。土壇の上に登り、トカゲの後を追いかけて、トカゲみたいにもつれてトカゲみたいにすばしこく走り回る。彼らは種子や花に感嘆し、昆虫を調べ、あらゆることの理由を母に尋ねにやってくる。それはあずまやとの間の際限ない往復だった。田舎では、子供たちにおもちゃなど必要ない。あらゆることが彼らの心を占めるからだ。子供たちが先生から学課を教わるとき、ヴィレムセンス夫人は、刺繍をしながら席を共にした。彼女は一切口を挟まず、先生も子供たちも見ることなく、注意深く耳を傾けていた。それは、言葉の意味を正確に理解しようとするかのようにもあり、また漠然とルイは力をつけているか知ろうとするかのようにもあつた。兄は先生に質問して学課を中断させることがあつた。彼の進歩が明らかになるのは、そんな時ではないだろうか。彼女の目はそのとき生き生きと活気を帯び、顔にはほほえみが浮かび、希望の込められた視線が彼に向けられるのだった。彼女は、マリーに対しては、ほとんど何も求めなかった。彼女の願いは兄に込められており、彼にある種の敬意を払っていることからそれがうかがえた。精神を高邁なものにしよう、また高い矜持を持たせよ

う、女や母がそう考えるとき、あらゆる機転を働かせるが、彼女もそうであった。子供は、いつか、このような振舞にはある思いが隠されていたことを理解するにちがいない。事実、彼は後にそれを理解したのだった。学課が終わると、彼女はいつも先生を最初の門のところまで送って行った。そこで、彼女は、ルイの勉強がどんな具合か先生たちから丹念に話を聞いた。その様子には深い愛がこもり、また大変好感を感じさせるものがあったので、先生たちはありのままを話し、ルイが弱いように思われるいくつかの点について学習させるよう助言した。それから、夕食の時間がやって来る。続いて、遊び、散歩、終わりに、夜の自習が行われるのだった。

これが三人の生活だった。単調だが充実していた。勉強と息抜きとがほどよく組み合わさって、退屈することが全然なかった。気持ち落ち込んだり、喧嘩したりすることなどありえないことだった。母の限らない愛が、あらゆることを容易にさせていた。彼女は二人の息子に、彼らの求めるどんなこともけつして拒まぬことで思慮分別を育て、ほめるべきときにちゃんとほめて勇気を育て、どんな状況にも必然があることを分かせて諦念を育てた。彼女は、理想的な心配りで、二人の天使のような性質を伸ばし、強化したのだった。ときおり彼女は、二人の遊ぶ姿を見ながら、これまで子供たちからわずかなりとも悲しい気持ちにさせられたことがない、と考えた。そう思うと涙がわいてきて、燃えるような彼女の目が潤んだ。深い完全な幸福というもの、こうしてわれわれに涙を流させる。それは、われわれのだけれど、漠然とした認識しか持たない天の姿が、そこに実際に映し出されて存在しているからなのだ。美しい日の光と、広大な水の広がり、絵のように美しい地方を眺めていること、子供たちの声を聞いていること、笑いの中にまた笑いを生む笑い声や、小さなさかいの声を聞いていること、しかもその小さなさかいには、二人の強い絆や、ルイのマリーへの父性的感情や、母に対する二人の愛が不意に噴き出すように現れている、そういう声を聞いていること、それが、素朴な

造作の長椅子に横になって過ぐす彼女の甘美な時間だった。子供たちは二人とも、幼い時にイギリス人の子守がついていたので、フランス語も英語も、まったく変わりにくく話すことができた。だから、母は二つの言語をかわるがわる会話に用いた。彼女は、二人の知的認識にどんな誤った観念も入り込ませず、心にどんな邪な主義も入り込ませることなく、見事に彼らの若い精神を導いた。何も隠さず、すべてを説明して、彼女は優しく二人を支配していた。ルイが本を読みたいと言うと、彼女はよく考えて、面白いが事実を記した本を選んで読んだ。それは、有名な航海者の生涯であったり、偉人や名高い指揮官の伝記であったりした。こうした本の何気ない細部には、年齢に関係なく、彼に世界や人生について多くのことを教える機会があるように思われたからだ。また、これらの本には、社会の最下層の、何の庇護もなかった無名の、しかし今は社会に重きをなすにいたった人々が、高貴な生涯を送るようになるまでにどのような手段や方法を用いたか、わかりやすく記されているからだ。この、いわば最も有益な授業は、小さなマリーが母の膝で寝入ってしまった夜に行われた。そうした夜は、ロワール河の水面に、空の様子が映し出されていた。だが、この授業はいつも、素晴らしきこの女の憂鬱をいつそう深くさせた。彼女はいつでも最後には、沈黙の中に沈み込み、じっと動かず、目にいっぱい涙をためて、何かを想うのだった。

「お母様、なぜ泣いているの」六月のある美しい夕べ、ルイは尋ねた。日中の暑さに続いて、まだ柔らかな明るさが残る、夜の帳が降り始める頃だった。

「それはね、ルイ」と、心を激しく震わせた感情を隠して、子供の首を引きよせながら彼女は答えた。「何の助けもなしに偉くなったジャムレイ・デュヴァル^(注2)の最初の貧しい境遇は、私があなたやあなたの弟に残してゆく境遇だからよ。やがて、あなたたちは、この地上で支えてくれる人も守ってくれる人もなく、二人だけになるの。私はあなたたちをまだ小さいままここに残してゆく。けれども、だから、あなたが強くなるのが見た

い。マリーを導いてやれるほどしつかり勉強したところを見たい。でも、それだけの時間が私にはないでしょう。あなたたちのことをとても愛しているわ。だから、そう考えると胸がふさがるの。せめていつか、あなたたちが私のことを呪わないように……」

「お母様、いつかお母様を呪うだなんて、どうしてそんなこと言うんですか」

「いつかはね、ルイ」と、母は彼の額に接吻していった。「私があなたたちにとって、いたらぬ母だったことがわかるからよ。私はあなたたちをこの世に置き去りにしてゆく。財産もなく……」と彼女は言い淀んだ。そして言葉を継いだ。「父親もなく」

この言葉を口にする、彼女の目からは次々に涙があふれた。彼女がやさしく息子を胸から離すと、ルイは一種の直感から、母が一人になりたがっているのわかった。彼は半分眠っているマリーを連れて母のもとを離れた。それから一時間後、弟が寝入ると、ルイは、足どりに気をつけながら、再び母のいるあずまやへ向かった。すると、彼の心に沁みとおるきれいな声で「ルイね、こちらにおいで」と言うのが聞こえた。息子は母の腕の中に飛び込み、半ばわななくように二人は抱擁した。

「マ・シェリー（私の愛する人）」と、ようやく彼は言った。彼はときどき母にこう言ったが、それはどんな愛の言葉も、自分の感情を表すには弱いように思われたからだ。た。「マ・シェリー、どうして死ぬかもしれないなんて思うの」

「病気だからよ。毎日力がなくなってゆく。お母様の病気には薬がないの。それはわかっていることなの」

「どんな病気なの」

「病気のことは忘れなくてはね。お前も、どうしてお母様が死ぬのかなんて知ろうとしちゃ駄目よ。」

息子は母にひそかな視線を注ぎながら、しばらく黙ったままでいた。母の目は空を仰いで、雲をじっと眺めていた。それは甘く悲しいひとときだった。ルイは母の死が間近だとは思わなかった。しかし、母の悲しみのわけはわからぬままに、その悲しみを心に感じていた。彼は母の長い夢想の時間をそっとしておいた。もしもっと大きくなっていたら、彼はこの気高い顔に、数々の幸福な思い出に入り混じったいくばくかの後悔の念を、女の全生涯を、読み取っていたろう。暢気だった子供の頃、冷やかな結婚、恐ろしい情熱、嵐の中で生まれ、雷に打たれ、何ものも戻って来られない深い淵へ引き込まれた花を。

「ねえ、お母様、どうしてぼくに苦しんでいるのを隠すの」と、沈黙の末にルイが言った。

「ルイ」と彼女は答えた。「苦しみは、よその人の目には映らないように、隠さなければいけないのよ。わたしたちは、笑った顔を見せていなければね。けっしてよその人に私たちのことを話したり、その人たちのことで私たちが思い煩ったりしてはいけないわ。これは家族の中で守られてきた教訓よ。ここには幸せの元があるの。お前は、いつかとても苦しまなければならないでしょう。そしたら、お母様のことを思い出してね。死にかけていながら、お前の前ではいつも笑っていたって。つらいことをお前には隠していたって。そしたらきつと勇気が出てきて、人生で出会ういろんな不幸に耐えられることでしょう」

このとき、彼女はあえて涙を飲み込んで、息子に処世の道や、財産の価値と基盤と存続について、また社会関係や、生活に必要なお金を得る正当な方法と、教育の必要性について、よくわかるように教えようとした。それから、彼女は、どうしていつも悲しみ涙するのか、そのわけの一つを彼にこう言いながら教えた。自分が死んだら、翌日から彼とマリーは二人きりで、わずかなお金しかなく、神の他にはもう誰も守ってくれる人もなく、極度の貧窮に陥る、そう思うからだ、と。

「そうだ、ぼくは大急ぎで勉強しなくちゃいけないんだ」と、ルイは母を見て叫んだ。そのまなざしには、

自分を嘆くような深く心に刺さるものがあつた。

「ああ、うれしい」彼女は言った。わかつてくれたんだわ、と思った。母は息子に何度もキスをし、その頬を自分の涙で覆った。

「ルイ」彼女は言葉を継いだ。「お前は、弟の後見人になってくれるでしょ。そのことを約束してくれるわね。もうお前は子供じゃないのよ」

「はい、お母様」そう彼は答えた。「でも、まだお母様は死なないでしょ。そうですよね」

「そうよね」と、彼女は答えた。「あなたたちを愛しているから、頑張っていていられるわね。それに、この土地はこんなにも美しく、この空気はとっても体にいいし、きつと……」

「お母様のおかげで、ぼく、前よりもずっとトゥーレーヌが好きになりました」と、息子はとてもうれしくなっていた。

ヴィレムセンス夫人が、自分の死を間近に予感して、長男にこれからどういう運命が待っているかを話した日から、ルイはそれまでに比べ、気が散ることが少なくなり、熱心になり、あまり遊ぼうとしなくなった。彼はすでに満十四歳になっていた。そして、兄が、騒々しく遊ぶ代わりにうまくマリーを説得して本を読んでやることができるようになったということもあってか、二人が柘榴屋敷の窪んだ道や、庭や、段々になった土壇で元気よく遊び回ることは、以前に比べて少なくなった。二人は自分たちの生活を母の沈んだ物思いに合わせ、母の顔色は日ごとに黄色味を帯びながら青白くなっていた。額はこめかみにかけて窪んでゆき、夜を重ねるごとに額のしわは深くなっていた。

この小さな一家が柘榴屋敷にやって来てから五ヵ月後の八月、すでにすべてが変わっていた。老家政婦は、唯一情熱的な魂と子供たちに対するあり余るばかりの愛情によって支えられている女主人の体を、ゆっくりと

破壊してゆく病の軽い兆候にすでに気が付いていて、暗く沈んだ面持ちだった。彼女は、夫人の年の割には早すぎるこの死に隠された秘密を知っているようだった。まだ美しく、昔なかったほど可愛いおしゃれをして、衰弱した体を着飾り、口紅をつけて、女主人が二人の子供を連れて上の土壇まで散歩しに行くとき、老アネットは、彼女がかつて知っていたうっとりするほど美しい女と同じ女とは思えないヴィレムセンス夫人を見て、しばしば始めた仕事のことも忘れ、手にシーツを持ったまま、ポンプのところに植えられた二本のサビナビヤクシンの間に顔を入れ、あふれ出てくる涙をこらえようとするのだった。

はじめはあんなに陽気で、あんなに活気のあったこの瀟洒な家が、陰鬱になったようだった。ヴィレムセンス夫人は黙りがちになり、誰もめったに外出せず、トゥール橋まで彼女が散歩に出かけることは、よほどの努力をしない限りもう無理だった。いつしか不意に想像力が豊かになったルイは、いわば自分と母とを一体化できるようになって、紅の下に隠された疲労や苦痛を読み取り、母のためにあまり散歩が長くならないよう、いつも何かうまい口実を見つけ出した。その頃、トゥールの小クルティユー（パリの東の城門付近にあった歓楽街）ともいべきサン・シールを歩いていた陽気なカップルや散歩中のグループは、夕方、堤防の上方にある土壇に沿って、青白く痩せ、喪服を着て、かなり憔悴した様子だがまだ人目を引く輝きを持った女が、亡霊のように通って行くのを目にしていた。大いなる苦しみというものは、自然に人に伝わるものである。小作人夫婦も、おのずと言葉少なになった。ときおり、農夫と妻とその二人の子供が、彼らの家の前に集まるようになった。アネットが井戸で洗濯をし、夫人と子供たちがあずまの下にいても、この明るい庭のどこからも、少しも音が聞こえなくなった。ヴィレムセンス夫人は気付かなかったが、みな痛々しい目で、じっと彼女のこのを見守っていた。彼女と近づきになった者にとって、彼女はそれほど良き人であり、今を見越していた人であり、立派な人であった。何かはわからぬ病に侵された彼女の余命は、たしかにブドウやおいしい果実のもと

らす好ましい影響で伸びたにはちがいがなかった。しかし、トゥーレーヌに輝くばかりに美しい秋が訪れ始めた頃から、もう彼女には、子供たちだけしか見えなくなった。あたかも臨終の時のように、四六時中子供たちだけを見て、彼女は喜んでいた。

六月から九月の終わりまで、ルイは、母には内緒で夜も勉強し、大変な進歩を遂げていた。彼はすでに代数の二次方程式にまで達し、画法幾何学を修了し、図面も見事に描くようになっていた。このままゆけばしまいには理工科大学に入る若者に課される試験にも合格できるくらいになったろう。夕方ときおり、彼はトゥール橋まで散歩に出かけることがあった。そこでルイは、百日天下のとき皇帝軍にいたために予備役に回された海軍大尉と知り合った。この旧帝国海軍軍人の男性的容貌、勲章、歩き方は、彼の想像力を大いに刺激した。また、この軍人にとっても、活力で目がきらきら輝いている少年は好感を感じさせた。ルイは戦争の話が聞きたくてたまらず、またほかのあらゆることにも興味があったから、この海の男がいつもいるところに遊びに行つて、彼といろいろな話をした。この予備役軍人には、友でもあり散歩仲間でもある歩兵大佐がいた。彼もまた同じ理由で軍の要職から追放された人物だった。そのおかげで、ガストン少年はかわるがわる野営生活と艦上生活とを知ることができた。そうして、彼は二人の軍人を質問責めにした。ルイは、彼らの不運を心から残念に思い、その生活の厳しさをわが事のように理解した。その上で彼は、母に気晴らしにこのあたりを旅行したいと許しを求めた。ヴィレムセンス夫人は、ルイの進歩に驚いた先生たちから、息子は勉強のしすぎだと聞いたところだったので、非常に喜んでその願いを聞き入れた。ルイは大変な距離を歩いた。疲れに負けない体を作りたと思って、最も高い樹に信じられないほど敏捷に登ったり、水泳を勉強したり、朝まで寝ずに起きていたこともした。もう彼は子供ではなかった。顔を太陽に小麦色に焼かれ、すでに何かわからぬ深い考えが顔に現れている一人の青年になっていた。

十月になると、ヴィレムセンス夫人は、もう昼が来るまで起き上がることができなくなった。昼になれば、ロワールの川面に反射し段々になった土壇に集中的に射す太陽の光が、当国の医者が転地療養を勧めるナポリ湾の熱くもあり生温かくもある日中の気温と同じくらいの気温を柘榴屋敷に作り出してくれる。そのときになると、彼女は常緑樹の一本の下に椅子を出して腰掛けるために、起き出すのだった。二人の子供たちは、もう彼女のそばから離れようとしなかった。勉強は中断となり、教師たちには暇が出された。子供たちも母親も、互いに気を使うことも気を紛らわせることもなく、心だけを通して生きていたと思った。もう涙もなければ、陽気な叫び声もなかった。兄は母の傍らの草の上に横になり、恋人のように常に彼女のまなざしの下にいて、その足にキスしていた。マリーは不安な様子で、母のために花を摘みに行き、悲しげにそれを差し出すと、若い娘がキスするときのようにつま先立ちして母の唇に唇を重ねようとした。大きな黒い目をした蒼白の彼女は、衰弱し、動きも緩慢になっていた。もう二度と嘆くこともなく、美しく健康に育った元気な二人の子供に、ただほほえみかけていた。それは一枚の崇高な絵だった。紅葉や半ば葉を落とした木々が醸し出す秋の物悲しい華麗さ、トゥーレーヌの空の太陽の穏やかな日差しや白い雲、この絵の背景には、そのどれも欠けることなく描かれていた。

ヴィレムセンス夫人は、とうとう医師に寝室から出ないよう宣告された。寝室は毎日、彼女の好きな花々で飾られ、子供たちもずっと部屋で過ごした。十一月のはじめ頃、彼女はピアノを弾いた。これがピアノに触れる最後となった。ピアノの上には、スイスの風景画が一枚掛っていた。窓のほうには、子供たちが互いに肩を寄せ合っていて、彼女に面を向けていた。しかし、その顔はおぼろげにしか見えなかった。彼女の視線は、子供たちから風景画へ、風景画から子供たちへとたえず動いた。顔が上気してきて、指は象牙の鍵盤の上を情熱的に駆け回った。それは最後の祝祭だった。誰も知らない祝祭、天才的な記憶のおかげで彼女の魂の奥底で挙

行し得た祝祭だった。だが、そのとき医師が入って来て、ベッドから出てはならない、と命じた。母も二人の子供たちも呆然と静まり返って、この恐ろしい宣告を受け取った。

医師が去ると、彼女は言った。「ルイ、土壇まで連れて行って。もう一度私の国を見たいから」

ただそれだけを口にした母に、ルイは腕を貸して土壇の中央まで連れて行った。そこに着くと、彼女の目は、おそらくは無意識にであろう、地上よりもむしろ天のほうへ向けられていた。しかし、このとき彼女には、もう、何が素晴らしい風景なのか見分けることはむずかしかった。彼女には、雲がぼんやりとアルプスの壮麗な氷河を示しているように見えていたからだ。不意に、額が歪んで皺ができ、彼女の目に苦悩と悔恨の表情が現われた。彼女は子供たちの手を取って、激しい感情で拍動している胸にそれを押しつけた。「父親も母親も知らないで」彼女はそう叫んで、深いまなざしで二人を見た。「かわいそうな子供たち、あなたたちはどうなってしまうのでしょうか。二十年後には、あなたたちは私に訊くわね。私の人生は何だったのか、あなたたちの人生は何だったのかって。それは何てつらい説明なんでしょう」

彼女は子供たちを押し戻して、両肘を手すりに乗せ、手で顔を覆った。誰にも見られたくないと思いながら、ひととき自分一人の世界にいた。苦悩から覚めると、彼女はルイとマリーが天使のように自分の両脇に膝まづいているのに気がついた。二人は母の瞳を探り、それから二人とも優しくほほえみかけた。

「あー、このほほえみを、どうやったら持っていけるのでしょうか」そう言っ、彼女はあふれ出る涙をぬぐった。

彼女は寝室に戻ってベッドに横になった。もうベッドから離れることはできなかった。今度そこから出る時は、柩に横たわった姿でなければならなかった。

一週間が過ぎた。一週間の毎日が同じような時間の積み重ねだった。老アネットとルイは、夜交代でヴィレ

ムセンス夫人に付き添った。二人の目はずっと病の夫人の目に注がれていた。ここでも、あらゆる家庭で起こるのと同じ悲壮なドラマが四六時中展開していた。大好きな病人の呼吸が荒くなるたびに、最後かもしれないと、周りが慌てるのである。こうした運命的一週間の五日目、医師は花を部屋から片付けるように命じた。生命の影が一つまた一つと部屋から消えていった。

この日以来、マリーと兄は、母の額にキスしに来て、額が火のように熱くなっているのを唇から感じた。土曜の夜には、とうとうヴィレムセンス夫人はどんな物音にも耐えられなくなり、部屋を片付けることができず、そのまま放置しておかなければならなかった。こうしてその周りの世話をすることすらできなくなったことが、この華麗で雅を愛する女性の臨終の始まりだった。ルイはもう母から離れようとしなかった。日曜の夜更けのこと、ランプの光と深い静寂の中で、母が浅い眠りに入っているとばかり思っていたルイは、汗のにじんだ白い手がカーテンを開けているのに気がついた。

「ルイ」と彼女が言った。

死地に向かいつつある母の声の調子には、激情に突き動かされた魂が力をふり絞っているような何かひどく厳粛なものがあった。ルイの心に強烈に響き、彼は異様な熱さを骨髓に感じた。

「お母様、どうしてほしいの」

「よく聞いてね。明日になったら、私にはすべてが終わっているでしょう。もう会えなくなるのよ。ルイ、あなたは、明日、大人になるの。だから、いま、いくつか片付けておかなくてはいけないことがあるの。これは二人の秘密にしてね。小さいほうのテーブルの鍵を取ってちょうだい。そうそれよ。引き出しを開けてちょうだい。左に、封印した書類が二通あるでしょ。片方にはルイ、もう片方にはマリーと書かれているものよ」

「これですね、お母様」

「それはね、あなたたちの出生証明書なの。いつか必要になるでしょう。それをアネットに預かってもらいなさい。アネットは、あなたたちが必要な時に返してくれるでしょう。」

「今度は」と彼女は再び言った。「おなじところに、何行か書かれていた書類がないか見て」

「はい、お母様」

「マリー・ヴィレムセンス、出生地……」とルイが読み始めると、彼女がすぐに遮った。

「それで十分、もう続けなくていいわ。ルイ、私が死んだら、それもアネットに渡してちょうだい。そして、サン・シールの役場にそれを届けるように言つて。その届で死亡証明書が作成されるはずよ。これから手紙を一通書きます。必要なものをそろえて、私の言うとおりに書いてちょうだい。」

息子の準備が完了し、母の話を待つかのように向き直るのを見ると、彼女は静かな声で言った。

「伯爵閣下、閣下の御令室レディー・ブランドン様が、アンドル・エ・ロワール県トゥール近在サン・シールで逝去されました。御令室は閣下を許されました」

「署名は……」そこで彼女の声が止まった。ためらいが走り、心が揺れ動いていた。

「苦しくなってきたの」とルイが尋ねた。

「署名は、ルイ・ガストン、としなさい」

彼女はため息をひとつついてから、言葉を続けた。「手紙に封印して。宛名はこう書いて。ブランドン卿、ブランドン・スクウェア、ハイド・パーク、ロンドン、イギリス」

「それでいいわ」彼女は言葉をつづけた。「私が死んだら、その日のうちにこの手紙をトゥールで出してもらいなさい」

「次は」と一休みしてから彼女は言った。「お前も知ってる小さな書類入れを取ってちょうだい。そして、ル

イ、近くに來て」

ルイが再び元のところに腰を下ろすと彼女は言った。「そこに一万二千フランあるわ。それはあなたたちのお金よ。ああ、あなたたちはもつとお金持だったのに、もしお父様が……」

「お父様はどこにいるんですか」と、ルイが叫んだ。

「亡くなったわ」と、彼女は唇に指を立てて言った。「私の名誉と命を救うために亡くなったの」

彼女は目を空にやった。もし彼女にまだ苦しみのために流す涙が残っていたら、涙を流していたらう。

「ルイ」と、彼女は再び言った。「この枕もとで、私に約束してもらいたい。あなたが書いたことも、いま私が言ったことも忘れる、って」

「はい、お母様」

「ああ、私にキスして」

彼女はそれから長い間隙を置いた。それは、その間に神のもとから勇気を汲み上げるためだったのかも、またどれだけ自分に力のある言葉が残っているか量るためだったのかもしれない。

「よく聞くのよ。この一万二千フランがあなたたちの全財産なの。しっかりと手許から離さないように持つていなければ駄目よ。私が死んだら、裁判所の人が來て、このものすべてに封印することになるから。何もかもあなたたちのものではなくなるの。あなたたちのお母様さえも。もうあなたたちはここから出てゆくしかないよ。かわいそうだけど。どこに行くことになるかわからないけれど。アネットのためには、財産を取つてあります。毎年百エキユ（三百フラン）貰えることになっているわ。アネットはきつとトゥールに残るでしょう。でも、お前は、そしてお前の弟は、どうするの」

彼女は座った姿勢をとり、息子を直視した。ルイは、額に汗をにじませ、感動で青くなり、目に涙をいっぱ

いに湛えながら、母のベッドの前に立ち尽くしていた。

「お母様」心に響く声で彼は答えた。「そのことなら考えています。ぼくはマリーをトゥールの中学校に連れてゆきます。アネットに一万フラン預けて、それを安全に保管してもらい、弟のことは見てくれるよう頼みます。そして、残った百ルイ（二千フラン）をもつて、ぼくはブレストに行き、見習い水夫として船に乗ります。マリーが勉強している間に、ぼくは海軍大尉になります。だから、お母様、安心して死んでください。ぼくはお金持ちになって戻って来て、あの子を理工科大学に入れるか、あの子の好きな道に進めるようにします」母のなかば生気の消えた目に歓喜の閃きが光った。二つぶの涙が目からあふれ出し、熱でほてった両頬の上を流れた。そして、大きなため息が彼女の唇からもれた。彼女は、不意に大人になった息子の魂の中に父親の魂を見出して、あまりの喜びの強さに危うく死ぬところであった。

「ああ、ルイ、お前は天使みたいな子ね」と泣きながら彼女は言った。「お前は一言で私の苦しみを全部消してくれた。ああ、私は苦しんだ甲斐があったわ。これが私の子供なのね」と彼女は言葉を続けた。「こんな人間を、私が作ったのね。私が育てたのね」

彼女は両手を宙に上げて、無限の喜びを表現するかのようになり、その手を合わせた。それから身を横たえた。

「お母様、顔が真っ青です」息子がそう叫んだ。

「司祭様を迎えに行かなくてはいけないわね」彼女は消え入るような声で答えた。

ルイは老アネットを起こした。アネットは、すっかり狼狽し、サン・シールの司祭館へ走った。

朝、ヴィレムセンス夫人は、万端まで準備の整った感動的な状況の中で、臨終の秘跡を受けた。子供たち、アネット、そしてすでに家族の中に加わえられていた素朴な小作人一家が、膝まづいていた。合唱隊の貧しい子供が、そう、村の合唱隊の子供が、銀の十字架をベッドの前に差し上げ、年老いた司祭が息を引き取ろうと

する母の臨終聖体拝領を取り仕切った。臨終聖体拝領、何と崇高な言葉だろう。いや言葉以上に何と崇高な觀念だろう。それは、ローマ教会という使徒伝来の宗教のみが持ちうるものである。

「この方は、ずいぶん苦しまれた」と、司祭が言葉少なに言った。

マリー・ヴィレムセンスには、もう何も聞こえていなかった。しかし、彼女の目は、張り付いたようにずっと二人の子供たちを見ていた。深い沈黙の中で、誰もが恐れを抱きながら、臨終の母の呼吸を聞いていた。すでにそれは緩慢になっていた。それから、間隔をおいて深い吐息が漏れるようになった。まだ体の中で戦いがあつて、命があることを示していた。そしてとうとう、母はもう息をしなくなった。みんな泣き崩れた。マリーを除いて。この子には、まだ小さすぎて、母の死を理解することができなかった。アネットと小作人の妻が、この素晴らしい女の目を閉ざした。そのとき、かつての輝くばかりの美しさが、再び姿を見せた。二人の女はみんなを部屋の外に出し、寝室の家具をどけて、死者に経帷子を着せた。それから彼女をベッドに寝かせて、周りに大ろうそくを置いて火を点し、この地方の習慣に従って、聖水盆とツゲの枝と十字架とを並べ、鎧戸を閉めて、カーテンを引いた。それがすんだ後に、助任司祭がやって来て、ルイと共に一晚中お祈りを唱えた。ルイはけっして母のもとを離れようとしなかった。月曜の朝、埋葬が行われた。かつて、そのエスプリが、その美しさが、その優雅さが、ヨーロッパ中で有名だった女、もし彼女がさまざまな罪の中でも最も甘美なその罪を、もし許されて天国に入るために地上では常に罰せられるその罪を犯していなかったとするならば、ロンドンにあつては、彼女の葬列が一種の貴族社会の盛儀として新聞に大々的に取り上げられるニュースとなっていたはずである。そういう女の、遺体の後に付き従って歩いたのは、わずかに、年老いた女と二人の子供と、そして彼らの供をした小作人の妻だけだった。母の柩に土がかけられると、マリーは泣いた。そのとき、彼は、もう母に会うことができないとわかったのだ。墓の上には、簡素な木製の十字架が立てられた。そ

ここにはサン・シールの司祭が記した次の言葉が刻まれていた。

「ここに、薄幸の女、眠る

享年三十六歳

天上にて有せしむ名、オーギュスタ

彼女の冥福を祈られんことを」

すべてが終わると、二人の子供たちは柘榴屋敷に戻って、この住まいに最後の一瞥を投じた。そして、後のことはすべて小作人に任せ、裁判所への対応も頼んで、二人は手をつないで、アネットと一緒にここを後にしようとした。その時だった。老家政婦はルイをポンプの踏み段の上まで呼んだ。彼と二人だけになると、彼女は言った。「ルイ様、これは、奥様の指輪でございます」

ルイは泣いた。亡き母の生きていた時の面影がまざまざと蘇る形見を見て、心が激しく震えた。まだ小さな彼の器量では、このような比べようもなく大切なことに注意が及ばなかったのだった。彼は老アネットを抱きしめた。それから三人して出発した。窪んだ道を通り、坂を下り、トゥールへと向かった。もう振り返ることはなかった。

橋に着くと、マリイが言った。「お母様はいつもここを通ったね」

アネットには年老いたいとこがいた。昔、裁縫師をしていたが、引退してトゥールのゲルシュ街に住んでいた。彼女は二人の子供をこの親戚の家に連れて行った。彼女は、いとこと、二人と、共に暮らそうと考えていた。しかし、ルイは、彼女に自分の計画を説明し、マリイの出生証明書と一万フランを渡した。翌日、彼は、

老家政婦に付き添われながら、弟を中学校まで連れて行った。ルイは自分の境遇について、校長に事実をかなり手短に説明した。そして、帰途につくため、校門まで弟と一緒に来た。そこで、彼は弟に、これからこの世で一人つきりになることを話しながら、厳肅な気持ちでいくつもの忠告をした。そこには深い情愛が溢れていた。それからルイは、ひとときのあいだ弟をじっと見つめ、抱きしめた。さらに、もう一度弟をよく見、涙をぬぐって、歩み出した。何度も、何度も、彼は弟を見るために振り返った。弟は最後まで、中学校の入り口に立ち尽くしていた。

一月後、ルイ・ガストンは見習い水夫として軍艦に乗り組み、停泊地のロシュフォル港を後にした。彼は、コルヴェット艦^(注3)イリス号の舷側の手すりにもたれて、急速に遠ざかってゆくフランスの海岸を見ていた。やがて海岸は青い水平線の彼方に消えていった。しばらくすると、彼は、世間においても人生においてもそうであるように、この大西洋の真ん中で、たった一人で途方に暮れている自分を見出した。

「泣いちゃいけないよ、お若いの。誰にでも神様はいるものさ」と、老水夫が言った。その野太い声は、粗野だったが優しかった。

ルイは、誇りに満ちたまなざしを取り戻して、この男に感謝した。そして、海の男の生活に自分を合わせてゆくのだと腹を据えて、彼にお辞儀をした。ルイはもう父親になっていた。

アングレーム、一八三二年八月

(注)

1 摂政ダイヤモンド Régent

一七一七年、摂政フィリップ・ドルレアンが購入した一四〇カラットもの大ダイヤモンド。

一六九八年インドで掘り出され、原石は四一〇カラットの重量があった。一七〇二年イギリス人に買い取られてロンドン

2

にもたらされ、二年かけて研磨された。あまりに高価なため容易に買い手がつかなかったが、一七一七年摂政フィリップ・ドルレアンが二百万リーヴルでこれを購入した。その後、ルイ十五世が胸に付け、またマリー・アントワネットが髪に付けたといわれる。一七九二年、革命によって行方不明となるが、総裁政府が借金のかたにドイツの銀行家に渡したことが判明、ナポレオンが債務を保証して取り戻した。彼は、国民投票によって皇帝となると、このダイヤを戴冠式用の剣のつばに付けた。しかし、ワテルローで皇帝が敗北したため、ダイヤはマリア・テレジアによって没収となり、ウィーンに持つてゆかれた。だが、まもなく、フランスに王政が復活したことによって、ダイヤは返還となり、シャルル十世の戴冠式の王冠を飾った。その後、第二次大戦のドイツ占領下ではシャンボール城に隠され、第三共和制における国有財産売り立てでは高額のため売れ残り、現在ルーヴル美術館に展示されている。

ヴァランタン・ジャムレー・デュヴァル Valentin Jameray Duval

古代ローマ学者。古銭学者。

一六九五年シャンパーニュのアルトネーに農民の子として生まる。十歳で父を亡くし、残された母と子供たちは極貧に転落する。十二歳の時、同じ村の農民の下で七面鳥の世話をして働き始めるが、大変な悪戯者で、しかもその悪戯が、墓地を暴いて頭蓋を取り出し、壁につるすなど、容認しえないほどにエスカレートしたため、彼を雇ってくれる者がいなくなつたばかりか、母にも非難の目が向けられるようになる。そのため、一七〇九年の真冬、新たに生きる場を求めて故郷の村を棄てる。数日間歩き、途中、行き倒れになる寸前で隣村の司祭に救われるなどした後、近隣の村の羊飼いに雇い入れられる。そこで働き始めて二年目のとき、近くに隠者修道院エルミタージュを構える修道士と出会い、彼の下で働くことになる。修道士から教育を受け、大きく変貌を遂げる。やがて、抜きんでた知性と才能を開花させた彼は、ロレーヌ公レオポルドの庇護を受けることになり、地元のポンタ・マッソンやパリの大学に学び、さらにイタリアやオランダにも留学を許される。その後、ロレーヌに戻ってリュネヴィルの大学の歴史学教授、ロレーヌ公図書館長となる。レオポルド公の死後、一七二九年から公の息子フランソワ（フランツ）に仕え、フィレンツェに移る。一七三六年主君がマリア・テレジアと結婚し、オーストリア皇帝となったことから、引き続きオーストリアが支配するトスカーナに居住し、古代研究に没頭する。一七四八年、ウィーンに呼ばれ、帝室貨幣館並びに図書館 (le cabinet des médailles et de la bibliothèque impériale) 館長

となる。一七五五年ウィーンにて死去。

彼の生涯は、一七八四年に二巻本の著作集・書簡集が出版され、その冒頭で数奇な生涯が紹介されたことから広く知られるようになった。この注もそれに従っている。おそらくバルザックはこの著作を読んだものと思われる。

3
コルヴェット艦

スloop艦より大きく、フリゲート艦より小さな三本マストの軍艦。砲の数二十門以下。平時は一般に、高速巡航を利して、本国と植民地や海外基地間の命令書送付や報告書上申など、情報伝達のために使われた。